

## 八の宮の遺誠と大君

— 總角の巻私見 —

久保 重

宇治の大君の結婚拒否はきわめて特殊なものであつて、源氏物語はここに初めて抽象的思考のできる女性を生んだと云われている。

總角の巻は、父八宮の死後、宮家の当主となつた大君が、薫の熱心な求愛を、彼女自身薫をきらつてゐるのでないのに拒み続ける物語が主軸を成している、従来から注目を惹いて来た一卷である。本稿は大君の悲劇的思考の経路を、父宮の遺誠との関連の面から洗い出して見ようとするものである。

大君という呼稱は俗稱で、「紅梅」に初出以来、「竹河」・「橘姫」・「椎本」の巻巻で「姫君」と呼ばれて来たが、「總角」・「早蕨」では「姫宮」(一本「姫君」)と呼ばれている。父宮の死後、宮家の当主となつたからである。同様に妹姫も「中の君」から「中の宮」(一本「中の君」と呼び改められているが、本稿では俗稱に随うことにした。

私は、大君の結婚拒否については、三つの時期に区分して考察するべきだと考える。まず、十月一日の匂宮の宇治紅葉狩を境に、その以前と、紅葉狩を含むその以後とに分け、更に、前期の方を、中の君の結婚までと、結婚後とに分け、時の流れの順に、第一期、第二期、第三期と呼ぶことにする。

大君は、中の君が匂宮と結ばれた翌日、匂宮からの後朝の文を持参した使に禄を与えた。

しをん色の細長一かさねに、三重がさねの袴具して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、包ませて、供なる人になむ贈らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。ことさらに、人にけしきもらさじ、と思しければ、よべのさかしがりし老人のしわざなりけり、とものしくなむ聞こしめしける。(總角——角川文庫「源氏物語」に拠る。以下同じ)

句宮の宇治行きは、秘かなしのび歩きであつた。それが表立つてはなばなしく聲君扱いされたので、迷惑に感じて不興だつたのである。まさか大君のしたこととは知らないで、時代おくれで差出者の、弁の尼のさかしらだと解したのである。普通ならば、使が「例奉れ給ふ上童」だから、句宮の気のつかい様や、ひめぐとしておきたい事情の察しがつく筈であつたのである。禄を使童が断つた時点でも気がつかねばならなかつた。大君は決して向う見ずな人ではない。聰明で思慮深く、内攻的性格の人として描かれている。その人が、今上の后腹の第三皇子を、聲扱いにし、慣習通りに婚儀の一過程の押しつけをした——それには、自分達姉妹も皇族として、皇子と同一範疇に属する身だという家格意識が働いていると見られる。この様に大君が自家を重く見たその根柢は故父宮の教育方針にあると思われる。その一端がこの賜禄となつて現れたので、大君としては、中の君の結婚の後見を、責任感と愛情とから力のかぎり果したのであつた。しかし、それは京の句宮から見れば非常識な錯誤かと思われぬ。身分が違ふのである。そのことを大君はまだ知らない。この賜禄は京と宇治の異種の二つの世界の接点に起つた事件で、事は些やかだが、その持つている意味は大きい。物語の進行につれていずれはわかることである。

京の宮廷側から見ると、親王の遺児は、女房くらいの扱いに相当する身分である。句宮の母、明石中宮が、後に、中の君を京に召す様に句宮にすすめると、句宮は、女一宮の女房に加えようと中宮が思っているのだろうか、と勘ぐっている。

扱ふ 以下同じ)

きさいの宮……心ぐるしがり給ひて、二条の院の西の対にわたい給て、時々もかよひ給ふべく、しのびて聞こえ給ひければ、女一の宮の御方に、ことよせて思しなるにや、と思ししながら、おぼつかかなるまじきはうれしくて。(總角)

薫の女房群の中にも高い身分の姫君が加つている。

かの君達(注、宇治の姫君達)の程におとるまじき際の人々も、時世にしたがひつつおとろへて、心細げなる住ひするなどを、たつねとりつつあらせなど、いと多かれど……(宿木)

蜻蛉の巻には、兵部郷の宮の姫君が、女一宮の女房として出仕するさまが描写されている。

かぎりあれば、宮の君などうちいひて、裳ばかりひきかけ給ふぞ、いとあはれなりける。

親王の姫君が女房として出仕した例は、物語の中ばかりでなく現実の社会にも見られた。

皇胤紹運録に次の様な例が見える。

清和天皇——貞平親王(三品)——女子(京極御息所女房云々。後撰拾遺作者。号一条君。)

京極御息所は從二位褒子、左大臣時平の女、宇多帝讓位後に仕え、雅明・載明・行明三親王を生んだ妃。親王の御女が攝関家出身の妃に女房として出仕しているのである。次の二例も紹運録に見えるものである。

文德天皇——惟喬親王——三国町 古今作者  
宇多天皇——敦慶親王——女 中務、歌人、母伊勢

三国町、中務どちらもお女房名である。この以外に、系図に上っていない姫君の場合も勿論考えられる。

大君は現実社会における自家の環境については何も知らされていなかったであろう。昔物語を除けば、彼女の知識源は主として父宮の談話であった。父宮は浊世の話題は好まなかっただろう。親王家の姫君としての教養と心構え、それも八の宮の好みの方向に強く引かれた教育方針の下に、選択された話題が聞かされたと推測される。後に、匂宮の宇治の紅葉狩の際に、大君は心に大きな痛手を受け、その時始めて現実のわが家格に直面するので、上に述べた通り、その時点を以って、前後に時期を区劃する所以である。

ここで、八宮の遺識を見えたい。

秋深くなり行くまゝに、宮はいみじうもの心細くおぼえ給ひければ、例の静かなる所にて、念仏をも紛れなうせむ、と思して、君達にもさるべきこと聞こえ給ふ。「……わが身ひとつにあらず、過ぎ給ひし御おもてぶせに、かるくしき心どもつかひ給ふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあぐれ給ふな。たゞかう、世にたがひたる契りことなる身と思しなして、こゝに世をつくしてむ、と思ひとり給へ。ひたぶるに思ひなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さる方にたえこもりて、いちじるくいとほしげなるよそのもときを負はざらむなむ、よかるべき」など宣ふ。

(椎本)

また出離の前日には、女房達に教訓を遺す。

おとなびたる人々召しいでて、「うしろやすく仕うまつれ。何事ももとよりかやすく、世に聞こえあるまじききは人は、末のおとろえも常の事にて、紛れぬべかめり。かゝるきはなりぬれば、人はなにと思はざらめど、くちをしうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしき事なむ多かるべき。ものさびしく心細き世をふるは、例のことなり。生まれたる家の程、おきてのまゝ、にもてなしたらむなむ、聞き耳にも、わがこゝちにも、あやまちなくはおぼゆべき。にぎは、しく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめ／＼かる／＼しく、よからぬ方にもてなし聞こゆな」など宣ふ。(椎本)

この二つは大体同じことを云っている。親王を父に、大臣の女を母に持った身分・家格を強調して、姫君には、宇治で生涯を送る様にと云い、女房達には姫君につまらない縁組を取りもつてない戒めている。

八宮は親王家という家格を万事に先行させて、自分の生涯だけでなく、姫君達にも寂寥と清貧とに耐えて気高く生きる生涯を要請している。彼の言葉にある「おきて」というのは、律令制が荘園貴族の興隆に浸蝕されて行く過程で、疎外され押し流される以前の、皇族を皇族らしくさせていた規制を指すものであろう。宮は時流に吞まれてあえぐ皇族達の零落したみじめな姿を、「契りかたじけなく」――祖先の尊貴な血統に対して畏れ多い――と見ている。八宮はかつて冷泉院の見舞に答えてこう返歌した

「あと絶えて心すむとはなけれど世をうち山に宿をこそかれ」

(橘姫)

また出離の前日には、女房達に教訓を遺す。

八の宮は「聖の方をば卑下して聞えなした」のであったが冷泉院は「なほ世にうらみ残りける」と見て「いとほし」と思ったとある。冷泉院は一首の調べに、宮の感慨一時流への對抗を感じたのであろうか。「世をうち山」——宮の遺誠を合せ読むと、理想を抱いて孤高を持した一貴人の姿勢がうかがえそうである。宮が姫君達に向つて禁じた方向は、成り上り者との結婚、京の後宮や権門などに女房として宮仕えすることなどであつたであらう。将来のわが子孫の繁栄を願うよりも、手塩にかけて育て上げた姫君達が、正しい道を歩み、清潔な生涯を送ることを、先ず望むのであつた。宮の、家柄の尊さを執拗に云い立てたのは虚栄や傲慢からでなく義務感からである。もはや昔の体面を保つ生活は望むべくもないのだが、せめて皇族としての精神的姿勢だけはするまいとする。この発想の出発点にあるものは趣味好尚ではなく、血の責任とも云うべき義務感であつた。また、彼は仏教から得た知識によつて、個人の尊厳と強さを知つていただろうし、生命の永遠性を堅く信じていた。だからこそ姫君に遺誠としてこの様な困難な課題を要請することができたのであつた。これは、残した者にも受けた側にも修正を望むことの出来ないという点で、苛酷とも云える至上命令であつたが、大君は、それを、精神主義的な、緊張度の高い生涯を送つた父宮の日常生活と、一体のものとして親近感をさえ持つて受け止めたであらう。今は宮家の責任者となつた彼女は、遺誠を守ることに——というよりはそれに縋り付いて、故宮追慕の日日を送つたことと思われる。大君の結婚拒否を問題とすると、大君自らの性格や生理と同じくらしい

(橋姫)

重さで、八宮の遺誠を、それも、大君が、それをどの時点で、どの様に受けとめていたかという面から、注目しなければならぬと思う次第である。

### 第一期

この時期には、遺誠が三回引合いに出されている。それを次に挙げると、

「なに事にもおくれそめけるうちに、この宣ふめる筋は、いにしへも、さらにかけて、とあらばかゝらばなど、行くすゑのあらましごとにとりまぜて宣ひおく事もなかりしかば、なほかゝる様にて、世づきたる方を思ひ絶ゆべく思しおきてける、となむ思ひ合はせ侍れば、ともかくも聞こえむ方なくて、さるは、すこし世ごもりたる程にて、み山がくれには心苦しく見え給ふ人の御うへを、いとかく朽木にはなしはてずもがな、と、人知れずあつかはしくおぼえ侍れど、いかなるべき世にかあらむ」(一)

「昔の御おもむけも、世の中をかく心細くて過ぐしはつとも、なかなか人わらへに、かろくしき心つかふな、など宣ひおきしを、おはせし世の御はだしにて、おこなひの御心を乱りし罪だにいまじかりけむを、今はとて、さばかり宣ひし一言をだにたがへじ、と思ひ侍れば、心細くなどもことに思はぬを、この人々の、あやししく心ごはきものに憎むめるこそ、いとわりなけれ。げにさのみ、やうのものと過ぐし給はむも、明け暮る、月日にそへても、御事をのみこそ、あたらしく心ぐるしく悲しきものに思ひきこゆるを、君だに世の常にもてなし給ひ



て、かゝる身のありさまもおもだしく、なぐさむばかり見奉りなさばや」(2)

故宮の御遺言たがへじと、思し召す方はことわりなれど、それは、さるべき人のおはせず、品ほどならぬ事やおはしまさむと思して、いましめ聞こえさせ給ふめりしにこそ。この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、ひとところをうしろやすく見置き奉りて、いかにうれしからまし、と、をりく直はせしものを。(3)

(1)は、薫が焦れて「ともかくもおぼしわくらむ様などを、さわやかに承りにしがな」と云つたのに答えた大君の言葉。

(2)は、中の君に、薫との結婚をすすめる前提として語りかけた大君の言葉である。

(3)は、弁の尼の大君に薫との結婚をすすめる言葉。

(1)で、大君は、「父宮は遺言の中で、私の結婚については触れていない。結婚するなというお考えだと解している」と云う。薫の求愛をそらすための、全くの逃げ口上の方便である。(2)は、中の君説得という目的上、結婚否定論的一面を強調したものである。大君の、この時期の心境が現われているのは次の条であらう。

「たのもしき人なくて世を過ぐす身の心うきを、ある人どもも、よからぬこと何やかやと、つきくに従ひつ、言ひいづめるに、心よりほかの事ありぬべき世なめり、と思しめぐらすには、この人の御けはひありさまの、うとましくはあるまじく、故宮も、さやうなる御心ばへあらば、と、折々宣ひ思すめりしかど、みづからはなほかくて過ぐしてむ。われよりは、さまかたちも盛りに、あたらしげなる中の宮を、

人なみくに見なしたらむこそうれしからめ。人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見ても。みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ。この人の御さまの、なのめにうち紛れたる程ならば、かく見なれぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、はづかしげに見えにくきけしきも、なかくいみじくつ、ましきに、わが世はかくて過ぐしはて、む、」

大君は薫をうとましく思うのでない。故父宮も薫と大君の結婚を望んでいた。――大君は遺言を結婚禁止令とは解していなかった。宮が度々薫の氣を引こうとしたのを大君は感じ取っていたと思われる。薫に姫君達の琴を聞かせたがり(橋姫)、自分の死後の姫達の身を案じて

「人にだにいかで知らせじ、と、はぐ、み過ぐせど、今日明日とも知らぬ身の、残り少なさに、さすがに、行くすゑ遠き人は落ちあふれてさすらへむこと、これのみこそ、げに世を離れむ際のほだしなりけれ」(橋姫)

(橋姫)

「子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を乱さずやあらむ。

女は、かぎりありて、いふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき」(椎本)

と薫にたびたび訴え、心の内では薫を望むに望みもした。

姫君たちの御有様あたらしく、「かゝる山ふところにひきこめては止まずもがな」と思し続け「宰相の君の、同じうは、近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかめり。まいて今やうの心浅からむ人をば、いかでかは」など思し乱れ、(椎本)

「古代なる御うるはしき」(總角)から、宮は姫君達の結婚について「かぎりありて、かたはならむ御有様はいとほしくも、など」(總角)と考えていた。継嗣令に規定されている皇族の結婚範囲が常に念頭にあったのだが、入山の直前には、その觀念も緩めて

思ふさまにはあらずとも、なのめに、さても人聞き口惜しがるまじう見ゆるされぬべきは人の、まご、ろに後見きこえむ、など、思ひ聞こゆるあらば、知らず顔にて許してむ、一所／＼世に住みつき給ふよすがあらば、それを見ゆる方になくさめおくべきを。(稚本)

と折れていた位だから、薫の求婚を大君が素直に容れたら父宮の望みに叶つたのである。(3)の弁の解釈はその意味では當っている。(八宮は弁の卑俗な結婚觀とは対照的な立場から考えていたのだから、弁のは完全に正しい解とは云えない。大君は拒否を決意した。その理由は、一つは妹の幸福を願うため、今一つは、薫が「はづかしげ」なからである。この二つの理由は一点でつながっている。大君は何よりも心やさしい人であつたのだ。若く美しい妹を世に出して上げたいと願ひ、一点非の打ちどころのない薫には、私はこの人にふさわしい程美しくもすぐれてもない、とおびえを感じる。愛の一つの姿として、心の内の謙遜が外に香気を放つ様な、大君のやさしさを私は想像する。と、同時に、遺誠が大君の心に作用している点を考えねばならないと思う。次を見よう。大君の結婚觀のうかがえる条である。

「ひとところおはせましかば、ともかくも、さるべき人にあつかはれ奉りて、すくせといふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば、み

な例の事にこそは、人わらへなるとがをも隠すなれ。ある限りの人は年つもりさかしげにおのがじ、は思ひつ、心をやりて、似つかはしげなる事を聞こえ知らすれど、こははか／＼しき事かは。人めかしからぬ心どもにて、たゞひとかたに言ふにこそは」と見給へば、引き動かしたばかり聞こえあへるも、いと心憂くうとましくて、動ぜられ給はす。

大君には、皇族の姫君らしい結婚ということが、常に念頭にある身分、教養、容姿については薫を適格者と認めているのだから、大君の氣にしているのは、結婚の様式だと思われる。親又はこれに代る「さるべき人に扱われ」て、儀式正しい、皇族の「掟」に叶つた婚儀を挙げて結婚するのが、「はかばかしきこと」即ち宮家の姫としてのやり方で、当人同志だけの結び付きは、野合に類する様な軽る軽しい振舞いと思えたのだろう。そこに遺誠の影響、或いは遺誠と同一発想が見られるのではないか。婚儀だけでない。皇族の人格を保つた結婚生活を姫君にさせるには、宮家を保ち守って、一切の後見をする責任者の存在が、欠くべからざる要件となる。父宮亡き今、自分が結婚の当事者となれば、後見をする者は誰も居ないから、中の君を薫と結婚させて、自分は力の限り後見役をしようと思案を定める。そこで、薫に、

世に人めきてあらまほしき身ならば、かかる御事をも、何かはもて離れても思はまし。されど、昔より思ひ離れそめたる心にて、いと苦しきを、この君の盛り過ぎ給はむもくちをし、……まことに昔を思ひきこえ給ふ心ざしならば、同じ事に思ひなし給へかし、身をわけたる、

心の中は皆ゆづりて、見奉らむこ、ちなむすべき。

と、弁を介して断る。この言葉の前半は、上の(1)同様、方便であることは自明である。その口の下から、後半の終りに本心が顔をのぞかせている。「身をわけたる心の中はみなゆづりて」血を吐く様に切実な、愛の告白でなくて何であらう。大君は無理をして、父の掟を守る。――遺誠の線上での思考の必然と考えられる。

大君はまた「人わらへなるとが」を気にしている。結婚後欠点が相手に見えてくることを恐れるのである。緊張感から生じる不安である。父母の面伏せにもなることでもあるから、これにも遺誠の影響が受け取られる。そういう外面から加わった圧力による緊張感ばかりでなく、相手を愛している故に欠陥を見せたくないし、また、自分が相手にふさわしい良きものでありたいという、内部から自然発生した熱望と、それを裏返しにした不安感とを、内攻的な彼女が抱いていたことも勿論であらう。

遺誠と自然感情とが複雑に幾重にもからみ合つて、大君は薫の愛が素直に受けられない、愛していないが、受けている故にこそ拒否する。

## 第二期

この時期に遺誠は言葉として現れていない。大君は、中の君が匂宮と結ばれたのは意外だったに違いないが、いそそと後見をする身分・教養・容姿の諸点で、宮家の姫の夫として匂宮は適格者であり、その人柄は薫が推薦したところ。宮家の体面を支える物資は薫が貢いでいる。遺誠は、大君の後見としての励みも含めて、先ず守

られている

薫の執心は一層加わってくる。しかし、大君は心を動かさない。さかり過ぎたるさまどもに、あざやかなる花のいろ／＼、似つかはしからぬをさし縫ひつゝ、ありつかず取りつくりたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見わたされ給ひて、姫宮、「われもやう／＼さかり過ぎぬる身ぞかし。鏡を見れば、やせ／＼になりもてゆく。おのがじ、は、この人どもも、われあしとや思へる。うしろでは知らず顔に、ひたひがみをひきかけつゝ、色どりの顔づくりをよくして、うちふるまふめり。わが身にては、まだいとあれが程にはあらず、目も鼻もなほしと覚ゆるは、心のなしにやあらむ」と、うしろめたく、見いだして臥し給へり。はづかしげならむ人に見えむことは、いよく／＼かたはらいたく、「今一年二年あらば、おとろへまさりなむ。はかなげなる身のありさまを」と、御手つきの細やかに弱く、あはれなるをさし出で、も、世の中を思ひつゝけ給ふ。

大君は女房達の若作りを醜いと思ひ、自身も若さを失いつつあるのが不安で、一・二年も経てば身の衰残は更に増すだらう。薫と釣合はとも取れないと嘆くのであった。気恥かしい人との結婚はますます気おくれがする。一方、匂宮は母后から注意されたこともあり、外出が困難で、宇治には不安の日が続く。大君はいよいよ独身生活を守る決意を固くする。

御文は明るる日ごとに、あまたかへりつゝ、奉らせ給ふ。おろかにはあらぬにや、と思ひながら、おぼつかなき日数のつもるを、いと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心ぐるしくもあるかな、と、

姫宮は思し嘆かるれど、いとこの君の思ひしづみ給はむにより、つれなくもてなして、みづからだになはか、ることと思ひ加へじ、といよいよ深く思す。

九月十日の頃、匂宮と薫は同車で訪れる。大君は、薫を匂宮に比べてその眞價を再発見する。

さかしら人の添ひ給へるぞ、はづかしくもありぬべく、なまわづらはしく思へど、心ばえのどかにもの深くものし給ふを、げに人はかくはおはせざり、と、見あはせ給ふに、「ありがたし」と思ひ知らる。

薫は物こしの対面を恨めしが、大君は、中の君の憂悶を見て来たので、結婚生活には入るまいと固く決意している。

やう／＼ことわり知り給ひになれど、人の御うへにても、物をいみじく、思ひしづみ給ひて、いと／＼かゝる方を憂きものに思ひはてて、「なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ。あはれと思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ。われも人も見おとさず、心たがはでやみにしがな」と思ふ心づかひ、深くし給へり。

その夜、大君は今までよりも素直に話すが、薫と直接の対面は「常よりもわがおもかげに恥づる頃なれば、うとましと見給ひてむもさすがに苦しきは、いかなるにか」

と、飽くまでもことわる。薫も無理強いはいしない。そのまま夜が明けて、帰京する。

以上逐条的に大君と薫の間柄を見て来た。大君は多妻制による女側の不安定な立場と、男の心変りに怯える女心とを、中の君の結婚生活を見ることによって、当の中の君以上に深く肉的に経験したの

だった。

第一期では、相手に自身の欠陥を見られるのと、結婚につまずいた場合に第三者に笑われることを気にしていた。結婚を、遺誠というレンズを通して、図式的に観ていたと云えよう。第二期の彼女は、「われも人も見おとさず、心たがはでやみにしがな」と願う。男の心変りを恨んで女も心変りしお互に軽蔑し合いみじめになるよりも、「慕わしい心持をお互に残した今の状態で結末をつけたい」と考えて薫を拒む。中の君という遮壁がなくなったので、諾否を明かにしなければならなくなった大君は、拒否に踏み切る側に決断したのである。第一期よりも男を見る目ができた彼女は、薫により深く惹き付けられながら、逆にその分だけ、自分は無資格者だとして深く思いこむところから、見棄てられた時のみじめな気持を先取りして、拒否の決意を固めたのである。薫の誠実さを見知っているのだから、捨て身で相手を信じて付いて行ってもよいところであるが、相手の愛が信じられなくなった時の、自分の心のみじめさが恐いのである。この思考の前提として、彼女が「誠実」に特殊な好みを持つてゐることが考えられる。多妻制による女の側の常住の不安という、一般的なおそれも勿論あるが、大君が、一人にかけた誠実の期待を裏切られることを、余りに怖わがるので、私は、男女の愛は多妻制では救われぬが一妻制では救われると云った単純なものでないことを、作者が知っていた様な気がする。同時に、大君が、若さ美しさその他、自身の価値によって男の愛をつなぎとめる自信のないところから、拒否に踏み切ってしまう誇り高さに、私は、彼女の心に

かまわっている。遺誠は、大君の復讐としての願ひも含めて、先ず守

しに見じと思ひしものを、身にまさりて心ぐるしくもあるかな、と、



びつたりと貼り付いている「遺誠」を見る思いがする。

### 第三期

この期に遺誠が見られるのは次の四ヶ所である。

「これこそは、かへすく、さる心して世を過ぐせ、と宣ひおきしは、かゝる事もやあらむのいさめなりけり。」(4)

「こゝには、ともかくも聞こえ給はざめり。なき人の御いさめは、かかる事にこそ、と見侍るばかりなむ、いとほしかりける」とて、泣き給ふ気色なり。(5)

物思ふときのわざと聞きし、うた、寝の御様のいとらうたげにて、かひなを枕にて寝給へるに、御ぐしのたまりたる程など、ありがたく美しげなるを見やりつ、親のいさめし言の葉も、返すく思ひいでられ給ひて悲しければ、「罪深かなる底にはよも沈み給はじ。いづこにもいづこにも、おはすらむ方に迎へ給ひてよ。かくいみじくもの思ふ身どもをうち捨て給ひて、夢にだに見え給はぬよ」と思い続け給ふ。

### (6)

「たゞ御心ひとつに世を恨み給ふめりしほどに、はかなき御くだものをもきこめしめしふれず、たゞ弱らせ給ふめりし、うはべには、なにばかりことくしく物深げにももてなさせ給はで、したの御心の限りなく、なにごとも思ふめりしに、故宮の御いましめにさへたがひぬること、と、あいなう人の御うへを思し悩みそめしなり」(7)

(4)は、十月一日、匂宮が対岸まで紅葉狩に来ながら、素通りして帰京したので、大君は、当の中の君以上に、惨憺たる衝撃を受け、宮の不実と、中の宮の受けた社会的恥辱とを痛感して絶望する。そ

して、遺誠の持つ意味の深さに思い当り、「自分は結婚するまい、どうか早く死にたい」と思う条である。

(5)は、大君の病を見舞いに、訪れた薫が、先日の紅葉狩の際に匂宮が、立ち寄れなかつた次第を語って慰めたのに、大君が答えた言葉。中の君の不幸について、父宮の遺誠はこういう事を予め教訓したのだったという。

(6)は、左大臣夕霧の六の君と、匂宮の結婚が内定し、年内に挙式という噂を、女房達が語っているのを、中の君は聞えぬ振りをしてうた、寝をしている。その美しく可憐な姿に、病床の大君は、しきりに遺誠が思い出されて悲しいので、父君の居給う所に迎え取られたいと嘆く条。

(7)は、十二月の雪の夜、大君の死後、弁が大君の思い出を薫に語る条。

紅葉狩の後の大君は、前の第一・二期とは異った人生観から薫の愛を受け容れない。結婚をも含めて、現世生活そのものを拒否するのである。「この世にはいさ、か思ひ慰むかなくて過ぎぬべき身どもなりけり」と思い込み、薫が彼女の病氣恢復のために修法を修しても「ことさらにもいとわしき身を」と思うので、

「なおかゝるついでにいかで失せなむ。この君のかく添ひ居て、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし。さりとて、かうおろかならず見ゆめる心ばへの、見劣りして我も人も見えむが、心安からず憂かるべきこと。もし命しひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ。さてのみこそ、長き心をも、かたみに見はつべきわざなれ」

宮の不実と、中の宮の受けた社会的恥辱とを痛感して絶望する。そ

と思ひし給ひて、「とあるにてもかゝるにても、いかでこの思ふ事し  
てむ、」

と心をかためている。

薫に対して抱いている愛の永続を望む心も、今では、思ひ出に残り  
たいと願うのみである。

「むなしくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく、思ひぐまなからじ、  
と、つゝ、み給ひて、はしたなくもおし放ち給はず」

この期に入つて、最もしばしば大君が遺誠を思ひにのせるのは、始  
めて現実の環境と直面し、つまづき、傷心の底にあつて、遺誠の深  
い意味に思ひ当つたからである。同時に誠を遺した父の、自分達姉  
妹に注いだ愛の哀しさ、切実さを思ひ知つたからである。

「やうのものと人笑へなる事を添ふるありさまにて、なき御かけをさへ  
悩まし奉らむがいみじさ。なほ我だにさるもの思ひにしすまず、罪な  
どいと深からぬさきに、いかでなくなりなむ」と思ひ沈むに、こゝち  
もまことに苦しければ、物もつゆばかり参らず。

弁は大君の厭世の原因を、匂宮の紅葉狩以来と薫に語っている。

「この宮の御事出で来にしのちいと物おぼしたるさまにて、はかな  
き御くだものをだに御覧じ入れざりしつものにや、あさましく弱くな  
り給ひて、さらに頼むべくも見え給はず」

紅葉狩の匂宮一行の行動は、大君姉妹の地位に何らの増減を加え  
るものではなかつた。父八宮在世中にも、初瀬詣の帰途宇治に一泊  
した匂宮は、薫らが八の宮邸を訪れるのを、対岸で羨しく眺めてい  
るのみであつた。「かやすき程ならぬ」身分上の制限があつて、訪

へてむ。さでのみこそ。長き心を。かたみに見はへきね。なれ」

問できないのである。大君の悲嘆は彼女が、八宮家の地位を過信し  
ているところから起つていふと云える。遺誠が意図しているところ  
は、姫君姉妹の自重で、宮廷からの待遇を要請するものではなかつ  
た。そこに食い違いがあつた。——と見るのは、われわれが、歴史  
的な現実を見知っている故の受け取り方で、つまり京側と同じ目で  
大君の「錯覚」を見るからである。大君は、一身と生涯とを賭けて、  
遺誠を信奉し、そのために献身的努力を続けてきた。大君の考え方  
に従えば、「中の君は匂宮の正妻である。正妻が、大勢の上達部の見  
ている所で無視されたのは、匂宮の不誠実心が全ての原因である。」  
ということになる。

「なほおとに聞く月草の色なる御心なりけり」

大君は皇族というものは、不誠実とは無縁の階層だと信じて来た。  
その信仰が匂宮の不信によつて破られたのは二重のショックであつ  
たろう。

「なにことも筋ことなるきはなりぬれば、人の聞き思ふことつゝ、まし  
く、所せかるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり」  
しかし、何よりもこたえたのは、突然やつて来た。中の君の不幸  
だった。

あたらしくをかしきさまを、あけくれの見ものにていかで人々しくも  
見なし奉らむ、と、思ひ扱ふをこそ、人知れぬ行くさきのたのみにも  
思ひつれ。かぎりなき人にもしの給ふとも、かばかり人笑へなる目  
を見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人さまにて経給はむは、たぐ  
ひ少なく心うからむ」など思ひ続けるに、いふかひもなく……

大君の感じたところでは、中の君は、当然受けるべき「札」を受けられず、無法に無視されたのである。そして今回受けた恥辱は、勾宮の正妻としての中の君の地位を、半永久的に潰滅してしまう性質のものであった。勾宮と中の君の結婚の噂は、さらに決定的・致命的に大君を打ちのめした。大君にとって、中の君が辱めを受けたことは、遺誠が破られたのと同じ意味を持つ。大君にも中の君にも責任のないところに、不幸が襲いかかって、遺誠をふみにじってしまったのだ。大君は遺誠が守られなかったことを思うと、よるべなさと悲しさから、父宮に回帰して行くことをのみ考えるようになった。道心―それもあるが、それ以上に大君は遺誠に代る帰趣として、父宮をもとめたのだと私には思われる。中の君の後見を薫に委ねて、京の宮廷が豊明節会で華やいでいる頃、大君は逝く。

宇治の大君の生きた、一図にもとめた遺誠の世界は、いわば、八宮によつて人為的・観念的に構築された幻の小宇宙であった。父宮は、姫達が家格を墮さずに終ることを望んだが、それはこの小宇宙でのみ可能なことであった。京の現実世界との接触で忽ち一角が崩れ、更に大君の死でこの小宇宙は消失してしまう。思うに、大君は、父の遺命を忠実に守って生きているうちに、自分でも気付かない間に、一人二人の人間の努力ではどうにもならない巨大な或る力―目に見えぬ歴史の流れ―と対峙したのであった。歴史的現実世界にはもはや存在を許されない「宮家の姫君」として、遺誠を守って力のかぎり精一杯に歩んだ大君を描いた、源氏物語の作者の思考―批判精神を、私はここに見る思いがする。皇族女性の悲劇的地位を描

いたこの批判精神を、私は高く買うものである。